

青年期における見捨てられ抑うつと境界例心性との関連

—恋愛対象への愛着スタイルを考慮に入れて—

13008PCM 中村 香澄

I. 問題と目的

青年期にある者と境界性人格障害者は共に親からの心理的独立が大きな課題となることが多い。(古川・北山, 2004)。青年期心性と境界性人格障害の精神力動は類似・共通している点が多いとされている(東山, 1998)ことから、青年期心性と境界性人格障害との判別が重要であると考えられる。

青年期は、第二分離固体化の時期であり、親からの情緒的離脱をしていく。そのため、「見捨てられ抑うつ」を抱きやすい情緒的交流が再活性化される(佐々木・小川, 1994)。また、青年期の発達課題として、Erikson (1968) は「同一性対同一性拡散」を提唱している。青年期において自我同一性を獲得していく過程で、同一性の拡散に巻き込まれてしまい、同一性の危機に陥ることもあると考えられる。

境界性人格障害の多くの症状の背景には、自我同一性の拡散や慢性的空虚感、あるいは見捨てられ抑うつがあるとされる(小此木・桜井, 1992)。Masterson (1976) は境界性人格構造の中核は、Mahler (1975) が提唱した、分離固体化段階の再接近期危機の乗り越えの失敗により生じた、見捨てられ抑うつであるとしている。青年期心性と境界性人格障害との間には、見捨てられ抑うつ、自我同一性の拡散という類似性が見られる。その一方で、境界性人格構造には、分裂機制や情緒的对象恒常性の低さが存在する。また、青年期心性として見捨てられ抑うつを呈する者と境界性人格特徴を有する者との間では、家族環境・養育者の養育態度が著しく異なることなどが指摘されていることから、両者は異なるものであり、青年期における境界性人格障害に類似する心性が、発達における危機的心性によるものであるとも考えられる。そこで、本研究では、青年期における見捨てられ

抑うつは、境界例心性によるものであるのか、それとも発達による危機的心性によるものなのかを、4 類型に分類した愛着スタイルとの関連から検討することを目的とする。

II. 方法

調査対象 : A 県内の B 大学に在籍する大学生を対象に調査を行い、回答に不備のあった者を除いた 200 名を分析対象者とした。

調査手続き : 2014 年 10 月 28 日、10 月 31 日の授業時間内に質問紙を配布・回収した。

質問紙構成 : フェイスシート、見捨てられ抑うつ尺度(佐々木, 1994)、成人版愛着スタイル尺度(中尾・加藤, 1999)、ミロン臨床多軸目録境界性スケール 17 項目短縮版(井沢・大野・浅井・小此木, 1995)から構成された。ミロン臨床多軸目録境界性スケールには、ダブルバレル質問が含まれていたため、一部加筆・修正を行なった。

III. 結果と考察

本研究では、青年期にみられる見捨てられ抑うつと愛着スタイルとの関連を検討するため、成人愛着スタイル尺度の 2 つの下位尺度の高群・低群から、愛着スタイルを恐れ型、とらわれ型、拒絶型、安定型の 4 つに分類して、愛着スタイルを独立変数、見捨てられ抑うつ尺度の下位尺度ごとの合計値を従属変数として、一元配置分散分析を実施し、有意な差が見られたため、Tukey 法による多重比較を行った。その結果、恐れ型はとらわれ型よりも「親密さへの不安感」が有意に高く、安定型よりも「親密さへの不安感」、「無力感」、「周囲との疎隔感」が有意に高くなることがわかった(表 1)。また、恋愛関係の経験別でも同様に検討したところ、「現在、恋人がいる」群では「親密さへの不安感」は恐れ型がとらわれ型と安定型より有意に高く、拒絶型が安定型より有意に高く、「無力感」は恐

れ型と拒絶型が安定型より有意に高く、「周囲との疎隔感」は恐れ型が安定型より有意に高かった。また、「現在、恋人がいないが、過去にいたことがある」群では「親密さへの不安感」は恐れ型が拒絶型、とらわれ型、安定型より有意に高く、「無力感」は恐れ型が拒絶型と安定型より有意に高く、「周囲との疎隔感」は恐れ型が拒絶型、とらわれ型、安定型より有意に高かった。これらのことから、「愛着スタイルが恐れ型・とらわれ型は拒絶型・安定型に比べて見捨てられ抑うつが高い」という仮説1は部分的に支持された。

表1 愛着パターン別の見捨てられ抑うつの平均値

		親密さへの不安感		
		F(3,197) = 30.51, p<.001		
恐れ型	57	13.00	6.98	***
拒絶型	49	8.18	5.38	
とらわれ型	32	5.41	4.51	
安定型	63	3.87	4.15	
		無力感		
		F(3,197) = 17.70, p<.001		
恐れ型	57	6.96	3.82	***
拒絶型	49	4.71	2.64	
とらわれ型	32	4.63	3.11	
安定型	63	2.87	2.58	
		周囲との疎隔感		
		F(3,197) = 20.64, p<.05		
恐れ型	57	8.25	3.67	**
拒絶型	49	5.63	2.83	
とらわれ型	32	4.66	2.88	
安定型	63	3.90	2.95	

注) ***p<.001, **p<.01

拒絶型は、他者との関わりに対して冷淡で、他者に関心を示さないため、見捨てられ抑うつを肯定することも否定することもないと考えられる。そのため、他の愛着スタイルとの間に有意差が見られなかったと考えられる。しかし、「現在、恋人がいる」群では、拒絶型が安定型より「親密さへの不安感」、「無力感」が高くなった。拒絶型にとって、恋人との一体感や激しい感情が生じる恋愛関係は脅威となる。そのため安定した親密な関係を築くことができ、恋人との一体感や激しい感情を肯定的に捉えることができる安定型より「親密さへの不安感」が有意に高くなったのだろう。また、拒絶型が安定型より有意に「無力感」が高くなったことに関しては、拒絶型はそれまで感じたことのなかった、恋人との間で生じる激しい情動に対処しきれない自身に対して無力感が高まるのに対して、安定型はそれらを肯定的かつ受容的に捉えるこ

とができることで、それらに対処しきれないという無力感を抱きにくいためであると考えられる。また、「現在、恋人はいるが、過去にいたことがある」群では、拒絶型は恐れ型より、「親密さへの不安感」、「無力感」、「周囲との疎隔感」が低くなった。これは、恋人からの離別により、脅威と感じていた、一体感や激しい感情から解放されたことで、恋愛関係を経験する以前より拒絶型の「親密さへの不安感」、「無力感」、「周囲との疎隔感」が低下したこと、恐れ型が恋人との離別により、他者から拒否されたと感じて無力感が高まったことによるだろう。また、安定型ととらわれ型との間に有意な差が見られなかったことは、愛着が不安定な人は、未熟な防衛スタイルを用いやすい（蓮花，2008）ことから、とらわれ型は見捨てられ抑うつを否認・抑圧しているためだと考えられる。また、とらわれ型は、「親密さへの不安感」が恐れ型より有意に低くなった。これも、とらわれ型が見捨てられ抑うつを否認・抑圧したためだろう。以上のことから、青年期にみられる見捨てられ抑うつは、幼児期の母子関係に起因するが、それ以降の愛着対象との関係性にも影響されることが推測される。

また、見捨てられ抑うつと境界例心性との関連について検討したところ、見捨てられ抑うつの全ての下位尺度と境界例心性との間に有意な正の相関があることがわかったことから、「青年期における見捨てられ抑うつが高いほど、境界例心性が高くなる」という仮説2が支持された。

これは、青年期における見捨てられ抑うつと境界例心性の根底に、基本的信頼感の獲得の失敗、自我同一性の獲得の失敗といった、類似性が存在するためだろう。しかし、青年期における見捨てられ抑うつは恋愛経験にも影響されることから、境界例心性の中核とされている見捨てられ抑うつとは異なる点が見受けられた。

IV. 今後の課題

今後の課題として、幼児期以降の愛着対象との関係性による影響、青年期危機の乗り越えによって境界例心性がどのように変容していくかを検討する必要があるだろう。